

# ブタイ遺跡調査報告会

平成 29 年 (2017 年) 2 月 12 日 (日)

調査原因：工場用地整備工事

調査主体：竜王町教育委員会

調査機関：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

調査期間：平成 28 年 (2016 年) 7 月～12 月



調査地位置図



調査地遠景 (背後に見えるのは鏡山)

## 1. ブタイ遺跡の概要

ブタイ遺跡は蒲生郡竜王町山面にある遺跡です。平成 14 年度に行われた工場用地整備工事に伴う発掘調査では、7 世紀後半～8 世紀後半頃 (約 1,300 年～1,400 年前) の、大きな柱穴からなる掘立柱建物が数棟と、それら建物群を囲む溝などが見つかリ、多くの土器などがみつかっています。

## 2. 今回の調査成果

今回の調査は工場用地整備工事に伴う調査であり、平成 14 年度の調査地に近接する地点で発掘調査を行うこととなりました。調査の結果、平成 14 年度調査地付近では 8 世紀頃 (約 1,300 年前) の掘立柱建物がみつかるとともに、幅約 5m・深さ 1.7m の大きな人工水路 (大溝) がみつかり、多量の土器や木器などが出土しました。

大溝から出土した土器は、主に須恵器と呼ばれる土器です。須恵器とは 5 世紀頃 (約 1,600 年前) に日本に伝わった、朝鮮半島由来の土器で、陶器のご先祖様といえます。それまでの土師器とは違い、本格的な窯で焼き、表面が淡い青色の特徴的な土器です。須恵器には坏・壺・甕などの多様な器種があり、日本各地で 9 世紀頃 (約 1,200 年前) まで作られました。

ブタイ遺跡の西方にある鏡山は、鏡山古窯趾群として県下最大の須恵器生産遺跡として周知されています。竜王町域のみならず、野洲市域・湖南市域の山麓には多数の須恵器を焼いた窯跡があることが分かっています。ブタイ遺跡でみつかった須恵器には、焼きが弱いものや焼け歪んだものが多く含まれるので、鏡山古窯趾群と密接に関係する遺跡として注目されています。



## ◎鏡山須恵器生産を管理する公的施設跡



図3 掘立柱建物跡

平成14年度の調査と合わせてみつけた掘立柱建物跡は合計21棟です。すべての建物が同時にあったわけではなく、何度か建て替えられたようです。図4にある谷地形をはさんで北側の建物群には、四角く大きい柱穴の建物があり、ほぼ南北を向いています。このような建物は古代の公的施設などでよくみられま



図4 遺構平面図

## ◎整備された運河

公的施設跡と思われる建物群は周りが溝で囲まれており、西側の溝は特に大きなものであったことがわかりました(大溝)。大溝は幅約5m・深さ約1.7mもありました。みつかったのは60m程度の長さですが、直線的に南北に延長すると、南側は鏡山裾野の谷にあたり、北側は日野川にあたります。

大溝の延長線上、日野川の傍にある西川の集落が南北に長い形をしているのは、もしかすると大溝がそこまで及んでいた名残りかもしれません。



図5 多量の土器や木器が見つかった大溝



## ◎大溝からみつかったもの



図6 出荷せずに捨てられた不良品の須恵器



図7 出荷せずに捨てられた製材木



図8 出荷せずに捨てられた木製の皿



図9 公的施設に勤める人のベルトの帯金具

### ●不良品の須恵器（図6）

窯の中で火のまわりが悪く硬く焼けなかったもの、火膨れしたもの、他の器が溶着したもの、歪んでしまったものなどは、出荷されずに大溝に捨てられたようです。

### ●製材木（図7）

全長2～3mもある板が多くみつかりました。いずれの板も幅20cm程で、規格品の製材木とされます。須恵器と同じく大溝に捨てられていました。鏡山の木々は須恵器窯で消費されるだけでなく、木材としても利用されていたようです。

### ●木製容器（図8）

木製の皿や槽（木を割り抜いて作った大きな器）などが多くみつかりました。完形品はあまりなかったため、出荷できずに捨てられたのでしょうか。

### ●帯金具（図9）

古代、公的施設に勤める人たちは、鍔帯（かたい）という今でいうベルトを身に着けていました。大溝からみつかったのは、鍔帯に着いていた巡方（じゅんぼう）という飾り金具です（職階によって材質や型が変わります）。このことから公的施設があったこと

を示す遺物のひとつと考えられます。

### ●木簡（図10）

「桐原郷黄原史」と墨で書かれています。

奈良時代頃は、字を書くのは主に公的施設に勤める人たちでした。帯金具と同じく、公的施設を示す遺物のひとつです。



図10 木簡（右側は赤外線写真）





ブタイ遺跡想像復元図

## まとめ

複数の掘立柱建物とそれらを囲むようにある溝、多量の土器や木器が捨てられた大溝、平城京などの公的施設で発見例が多い帯金具や木簡などがみつかったことから、平成14年度の調査と今回の調査でみつかった遺構は、鏡山の須恵器生産を管理するための公的施設跡と考えられます。多量の土器や木器がみつかった大溝は、幅が広いことや水深が深いことから、船の航行を意識した人工水路と思われます。大溝は掘立柱建物群とほぼ同じ南北方位を向く直線的な形であり、南端は約600m南側の現在の美松台東方の谷に、北端は約2km北側の東山道（推定）か日野川と接続していたと考えています。窯から搬出された製品を、集積する施設に一度運び込み、選別した後に出荷するための運河的な機能があったと考えられます。大溝から多量に出土した土器や木器は、選別場で投棄されたものと思われます。

平成14年度と今回の調査により、鏡山山麓の古代の様子を垣間見ることができ、須恵器生産に関係する施設が存在したことが分かりました。鏡山山麓で長く行われた須恵器生産は山の中だけに留まらず、山麓から平野部にかけて様々な関係する施設が展開していたことが明らかとなりました。

今はきれいな田園地帯となっていますが、約1,300年～1,400年前には須恵器生産やこれに付帯する板材や容器などの木器生産、生産域と生産物を管理する施設や生産に関連する工人集落などが広域に展開し、それらに伴うインフラなども整備された小都市的な景観が広がっていたことが想像されます。